NONAKA SAXOPHONE FRIENDS

vol.32

Contents

表紙
セルマー・パリ社
「Jubilee(ジュビリー)」

最終号スペシャル対談
1 平野公崇×伊東たけし

注目の若手プレーヤー①
7 「作田聖美」

注目の若手プレーヤー②
8 「小山弦太郎」

9 新メカニック講座　最終回

10 大石将紀
これから留学を考えている人へ　最終回

11 NAOH
カカワリ講座!　最終回

12 NSF information

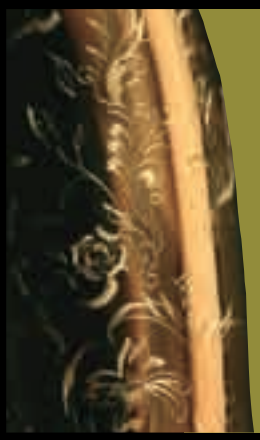
16 誌上大抽選会 当選者発表

Report
18 第29回サクソフォーンフェスティバル

20 新製品紹介「セルマー・パリ社 Jubille(ジュビリー)」

21 ノナカ サクソフォン フレンズ
最終号に寄せて

24 世界に広がる
野中貿易のネットワーク



C O V E R

セルマー・パリ社 Jubilee (ジュビリー)

クラリネット奏者として活躍していたヘンリー(アンリ)・セルマーが、パリのアトリエでリードとマウスピースの製造を始めたのは1885年のこと。これが礎となって本格的に楽器製造を開始。1922年にはセルマー初のサクソフォン「シリーズ22」を発表、そして1929年にはサクソフォンを発明したアドルフ・サックスの会社を買収し、正統なサクソフォンの歴史を継承するブランドとして今日に至っている。

セルマー・パリ社が創立されて125周年にあたる今年、セルマー・サクソフォンの全機種をリフレッシュさせる一大プロジェクト「ジュビリー」を発表(p.20参照)。

より優美になった外観と、さらに深まったその響きのもつ魅力をぜひご堪能いただきたい。

季刊「NONAKA SAXOPHONE FRIENDS」Vol.32　2010年 春号
発行日　2010年4月15日
発行所　ノナカ サクソフォン フレンズ事務局
〒231-0011 横浜市中区太田町4-46 野中貿易株式会社内
TEL. & FAX. 045-224-5850
URL http://www.nonaka.com/nsf/

デザイン　杉井孝則
表紙　セルマー・サクソフォン「Jubilee」
本文写真　岡　伸治
編集協力　榎本孝一郎
印刷　(株)野毛印刷社　非売品

最終号スペシャル対談

平野公崇 × 伊東たけし

どのくらい自分が音楽を好きか、どのくらいこの楽器が好きか……

INTERVIEW

クラシックとジャズ、ジャンルも違い、15歳という年齢差がありながら、かねてから親交があったという伊東たけし氏と平野公崇氏。おふたりを結びつけたセルマーサクソフォンのこと、音楽観、後進への思いなど、話は尽きない。

Takeshi Ito × Masataka Hirano

コンクールの結果が駄目だったとしても、音楽を好きだという気持ちに変わりがあるわけじゃない。――平野公崇

好きになるともう一途 サクソフォンも然り!

平野公崇（以下平野） 多分初めてお会いしたのは、もう10年以上前。中川英美さん（野中貿易株式会社役員）の結婚式ですよね。
伊東たけし（以下伊東） ほんと？ 影薄かったな（笑）。
平野 ひどいな（笑）。でも、そうですよ。
伊東 野中貿易とは何年ぐらいの付き合い？
平野 伊東さんほどじゃないと思いますけど、20年くらいかな。
伊東 おれはまだ学生だった頃からだから、35年は優にたっているね。
平野 今おいくつなんですか。
伊東 55。
平野 松井だ（笑）。
伊東 平野は？
平野 40です。いつのまにか子どもも2人。
伊東 げ、ほんとかよ。でも、面白いものだよな。だってクラシック界とジャズ界で、こういう会社がなかったら、出会うことなんてないわけじゃない。
平野 そうですね。
伊東 学生の頃からもさ、宗貞先生とか、クラシックの人たちもいっぱい来てて、学んだことも多かったし。
平野 伊東さんの最初のセルマーは？
伊東 高校生のとき、当時習っていた先生に選んでもらったマークⅥが最初。
平野 マークⅥが現役で出ている頃ですね。
伊東 もう最後のほうだよね。それから4〜5年でⅦになったと思うよ。
平野 ちなみにそのマークⅥは？
伊東 ないね。どこかに行っちゃった。売ったともどうしたとも記憶にない。平野はコレクションするタイプ？
平野 僕ですか？ いや。
伊東 じゃあ一緒だ、おれと。おれも、今自分が現役で使えるものしか要らない。好きになるともう一途だね。楽器に限った話じゃないけど（笑）。好きなものっていうのは自分が今使えるもので、それにとことんのめり込むタイプだから、そうじゃないものを置いておくと、すごくかわいそうに見える（笑）。それに器械ものだから、置いておくだけでは駄目になるような気がするんだよ、車と同じで。
平野 駄目になりますよ。
伊東 実際、しばらく置いておいた楽器を吹いてみると、なじむまでまた時間がかかったりするじゃない。そうしたら、あれもこれも簡単にホイホイホイってできないタイプだから、どうしても1本になっちゃう。それなら、誰か使いたいっていう人がいたらそのほうがいい、その楽器のためにも。
平野 やっぱり返してくれみたいなのはない？
伊東 貸したものが返ってくるわけがないじゃない（笑）。
平野 僕は、人に貸していて、その音があまりにも良かったから、返してくれって言ったことがあります。勘違いだったって。魔が差したって（笑）。
伊東 楽器で表現したいもの、イメージしている音色ってあるじゃない。で、あっちもいいな、あっちを自分の中に取り込んでみようかなとか思ったときに、一瞬自分が見えなくなって、大切なものまで要らないものとして捨てちゃうみたいなさ、そういう瞬間ってあったりするよね。で、我にかえって、返してくれって（笑）。
平野 わかってもらえた（笑）。

リセット……シャッフル……音楽家にとっては日常茶飯事

伊東 平野と初めて会った頃っておれが一番迷っている時期で、自分のいいところも悪いところもわからなくなってたんだ。一度リセットしてすべてのものを一から創っていきたい、音楽に対する発想も含めてさ。でも、その音楽をどう方向づけるかっていうのが、もう何がなんだかわけがわからなくなってた頃。そういうときって、楽器もイコールで関係が悪くなって、他の楽器にいったりするよね。全部を違う方向に向けちゃって。で、ふと遠くを見たら、やっぱりこれは捨てちゃいけない部分だっていうことに気づいて、最初に信じて向かった道に戻るなんてことはあるよね。
平野 もうあれだ。1回ぐちゃぐちゃにして、シャッフルして。
伊東 そうそう、シャッフル。そういうのって日常茶飯事だと思わない？ だから、見極めが難しいんだよ。でもさ、結局自分自身が自分を一番わかっているから、嘘をつけない部分があるよね。
平野 そうですね。うんうん。
伊東 音楽家って、どんな人でも一様に正直だと思うんだよね。その部分が音楽をやるためのエネルギーになっている部分もあるし。その代わり、当然そこでクラッシュすることも多々あるんだけど、それを乗り越えることの連続で今がある、みたいな。ステージに立ったときは、今この瞬間に集中しなきゃいけない職業。演奏家の作業ってその瞬間しかないものだからね。でも、それをやるための日常っていうのは、それとまるで逆だったりすることが多いしさ。それが面倒臭いよな。
平野 どうして面倒臭いんですか。
伊東 だって、ちゃんと決まっていれば楽じゃない。
平野 なるほど。
伊東 でも、あ、こっちとか、あ、でもこれもとか、真実が。
平野 複数発生してしまう。
伊東 そう。でも、自分の中の真実は本当はただひとつで、そのためにいつもああだこうだやっている。それをやらないと、またそれもおかしい人生になっちゃう。
平野 そうですね。

クラシックを学ぶ学生は保険を掛け過ぎ!?

伊東 挫折を味わうことも必要だったりするんだよね。挫折をしないように生きる人生っていうのはさ、もしかしたら、一生涯かけて挫折なんだってこともあるよね。
平野 そうですね。でもほんと、挫折だったり、あるいは迷いだったりを経て、またより良くなりますよね。
伊東 その連続だもの。
平野 そういうことを、伊東さんのような、そろそろ重鎮の域に達する方が言ってくださると、若い人たちにはいいんじゃないかと。
伊東 そう？
平野 そう思いますよ。もとよりクラシックだ、ジャズだ、フュージョンだって、分ける必要もないし。いわゆる学校で勉強している学生は、レッスンで挫折していると思っているかもしれないけれど。大人、40を大人と言っていいのかっていうのはありますけど、おじさんの目から見れば、そんなものはまだ挫折のうちに入らない。ほんのちょっとつまずいたり、よたよたやっているだけで。もっと徹底的につまずいたほうがいいんだろうなと思うんです。クラシックの子って保険が掛かりすぎていると思うんですよ。たとえば学校があるでしょ。曲を吹くっていえば楽譜があるでしょ。何も考えなくても、流れに乗っていれば最後まで到達できる。楽譜を吹き始めたら、本人は別のことを考えても、最後の音までいけるわけだから。
伊東 オートマチックにね。
平野 そう、吹きさえすればね。それがいいとか悪いとか、まったく考えなくはないと思うんだけど。現場でずっと生きている人たちはきっと、今やっていることがこれで本当にいいのか悪いのかとか、大丈夫なのかとか、そういうことを痛切に。

小さいときから音楽の授業だけは寝てたんだ。音楽だけは自分のものだから何も言わないでほしい……。――伊東たけし

伊東　感じるよね。人に伝わるか伝わらないかとか。

平野　そこの部分、こちらサイドの人間は、漫然といきがちなんですよ。

伊東　だけど、全員が全員そうだったら困るけど、抜きんでて平野みたいなのも出てくるし。そうすると、たくさんの若い子たちが、あこがれとしてそっちに向かうわけじゃない。

平野　いやいや。

伊東　それに、ジャズも似たようなことは起こるからね。手慣れたフレーズを吹けば安全で、冒険も挑戦もしないで70%くらいの力で演奏すれば綺麗な演奏はできるよ。でも、だからなんなのっていうのがあるわけでしょ。

平野　なるほど。

ドにもいろんなドがある 勝手にドの位置を決めるな!?

伊東　クラシックの場合、いちばんの問題は順位を付けられることじゃない？　おれさ、小さいときから音楽の授業だけは寝てたんだよ。他の授業のときは勉強したよ。赤点を取らないように、親に怒られないように、先生に怒られないように。それで多少色気が出て、何番までに入ってやろうって、ちょっと頑張ったりとか（笑）。でも、音楽だけは自分のものだから何も言わないでくれと、そういうスタンスだったの、ずっと。それが間違いの始まりだったんだけど、こうなっちまったわけだから（笑）。幼稚園のときにさ、先生がここがドですよって言った瞬間に寝たの。君がそこをドと言うのはいい。五線譜があるのもわかる。でも、ドにはいろんなドがあるんだから、簡単にドだってオタマジャクシを置くなって。それが唯一、幼稚園のときの記憶だね。クラシックの場合は、教え上手、教わり上手がいて、そこで学んで人生を素敵に生きることも素晴らしいことだとは思う。ただ、平野も言ったように、流れにのっかっちゃうと、音楽にとって大切なエネルギーみたいなものがそがれてしまう可能性があるよね。

平野　器としてでかくはならないでしょうね。僕は、音楽に関しては、そんな伊東さんほどには思わなかったけど。でも、絵で同じようなことはありました。

伊東　絵で？

平野　やっぱり幼稚園の頃。絵が好きだったんですけど、ある日どうしても仕上がらない。親は迎えに来ちゃっているわけですよ。で、絵の先生が困って、いいのよ、そんなのはって、僕が悩んでた人の顔を丸でボコボコ描き始めちゃったわけ。あああって感じでね。僕としては、何をしてくれるんだよって。

伊東　自分の本意ではない。

平野　丸でいいわけない。ここまで描いたものを、途中から丸なんか描きやがってって、もうやる気がなくなっちゃうよね。

伊東　それはそうだよな。

平野　だから、伊東さんの気持ちはよくわかる。ドはこうだって言われると。

伊東　しらけちゃうよね。

平野　嫌ですよね。だから難しい。たとえば楽器を学ぶうえでも、人の話を聞かないと全然伸びないんだけど、すべて言いなりになっちゃうと、本人の思いを大切にしない人になっちゃうでしょ。その点、伊東さんは両方ちゃんとお持ちで。

伊東　いやいや。でも、バランスを取ることはすごく大切。バランスは音楽家にはマストだよね。時にがけっぷちを走ることがあるしさ。やっぱりバランスをしっかり持つ。これ以上行ったら倒れちゃうって、そこを見極めていないと。まぁ、若いときは背負っているものが少ないし、落ちかけてもいい。何かにときめいたりひらめいたりすることが多々あってさ、スポンジみたいに吸収力があるから、それでどんどん自分が成長するのがわかるから面白いじゃない。

平野　そうですね。

伊東　それに、若いときってさ、なかなか倒れるまではいかないじゃない。支えるものが小さければ簡単に支えられるもの。どんどん成長していったとき、土台が薄っぺらいと倒れちゃうよね。だから、そのぶんもっと厚い土台を作っていかなきゃいけない。さらにもっと進んだら、もっと強固なものがないと駄目になってくる。でも、クラシックの人の中には、テクニックもすごいところまでいった、ここまでやり遂げたっていうレベルで、ポキッと折れちゃう人がいるじゃない。1番になれなかったっていうだけでさ。おれたちなんか、客ゼロから始まって、そんな状態でもずっとやっていくうちに、ファンが1人、2人できて、4人になって、4人が8人になって、倍々ゲームで増えてきた結果が今ってこと。同じような状況に置かれたバンドはいっぱいあったし、サバイバルだよね。たまたまこういうふうに生き残れたことには感謝してるけど。その人が何のために音楽をやるかということを絶対に持っていなきゃ駄目だよね。そもそも好きだからやっていたわけでしょ。それがいつのまにかすり替わってくる。

平野　そうですね。

好きで始めた音楽が 勝ち負けになるコンクール

伊東　一生、先生がいないと生きていけない子もいると思う。どこかに所属していないと不安になることがあるかもしれない。そういう人は、その中で最大限のことをすればいいと思うけど、いずれにしろ、どのくらい自分が音楽を好きか、どのくらいこの楽器が好きか、その大きさに尽きるよね。自分には絶対嘘がつけない部分があるから、その部分を常に磨いてあげていれば、そこが指令を出してくれる。どうしたらいいかっていう判断がつくと思うんだ。そこがおかしくなるから問題なんだ。平野も、生徒とか教えていると、おまえ、そんなので来るな、みたいな。

平野　心配というか、びっくりしちゃうっていうか。そんなんでいいの？　自分の人生だけどいいの？っていうのはありますね。でも、いくら言ってもポカンとしていたり、何を言っているんだみたいになっちゃうから、最終的にはどうぞご自由にって言うしかない。まあ、若いっていうのはそういうものかもしれないけど。ひとつ、日本だけの特殊事情があると思うんです。僕は吹奏楽をやっていたんですが。

伊東　おれも吹奏楽はやっていたけどね、中高と。

平野　今、何団体ぐらいコンクールを受けるか、知ってますか。

伊東　知らない。

平野　知らないでしょ。小学校から大学、一般まで合わせると、ひと夏にコンクールを受ける団体が1万を超えているんですよ。毎年1万ですよ。1万人じゃないですからね。1万グループだから。

伊東　それはすごいね。

平野　とてつもない数でしょ。それで、結果が発表になるじゃないですか。いい結果だとギャーとかって、それもまた喜びすぎじゃないかって心配になるけど、駄目だって言われた人は本当にもうがっくりになっちゃうわけですよ。言ってみれば、世の中の大半の音楽好きがあの世界にいるじゃないですか。音楽が好きで入ったはずなのに、それがみんな勝ち負けみたいになっちゃうんです。

伊東　それはあるね、うん。

平野　いつの間にか、好きでやっているというより、勝たなきゃみたいな感じになっちゃってる。別に駄目だったとしても、自分が音楽を好きだという気持ちに変わりがあるわけじゃないんだから、普通に楽しくすればいいのに。でもまぁ、どうしても傷ついちゃうんでしょうね。

プロフィール

平野公崇／ひらのまさたか

1970年神奈川県生まれ。東京芸術大学卒業後、パリ国立高等音楽院に入学、サクソフォン科、室内楽科、即興演奏科を最優秀の成績で卒業。在学中にJ・M.ロンデックス国際コンクールを制し、日本人 サクソフォニストとして初の国際コンクール優勝者となり、翌年フランス・ボルドーにおいて、オーケストラ・ナショナル・ボルドー・アキテーヌの定期演奏会でC.アベルのコンチェルト“It”を世界初演。Sud-Ouest紙の絶賛を浴びる等、華やかなフランスデビューを果たした。同年、パリでギャルド・レピュブリケーヌ管弦楽団とA・グラズノフのコンチェルトを共演している。
2000年6月にはコンテンポラリー作品と即興で構成された異色のデビュー・アルバム『ミレニアム』をリリース。翌年ジャズメンとのセッションを収録した『ジュラシック』発売後は、コルトレーン生誕35周年記念ライヴでジョージ・ガゾーン、森山威男らと共演した他、山下洋輔（ピアノ）や坂田明、清水靖晃（サクソフォン）、渡辺香津美（ギター）、アキコ・グレース（ピアノ）、塩谷哲（ピアノ）といったジャズメンとのコラボレーションも多い。
2003年には、デビューアルバム3部作の完結編となるクラシックアルバム、「クラシカ」をリリース。斬新な企画を産み続けるその活動は常に注目されており、03年6月からは、三菱電機DCROSSで、毎月ライヴを行っている他、2004年5月には、読売交響楽団と自作を共演した（日本テレビ系列、深夜の音楽会で放送）。現在東京藝術大学、東邦音楽大学、洗足学園音楽大学、エリザベト音楽大学各講師。パイパース連載中。

「このピンクのラインがいいでしょ（笑）」「なかなか」伊東氏のケースはノナカ超軽量バックケース“シルバーアローシリーズ”

伊東　それはそうだよな。
平野　だから、その後の、たとえば大学に入ってきても、あおると燃えるんですよ。レッスンしていると痛切に感じるんですが、あおられると燃える体質になっちゃってる。音楽はもっとゆったり勉強しなよと言いたい。で、伊東さんがおっしゃっているようなことを言っても、ポカンとしちゃうんですよ。
伊東　なるほどね。自分自身の音楽を育んでいないっていうことだな。
平野　そう、忘れちゃう。最初からそういうつもりじゃないんだろうけど。
伊東　それはいけない。
平野　そう。勝ち負けもね、生き残りゲームで生き残って、やがて立派なミュージシャンになる、そういうところで切磋琢磨しているのならいいんです。コンクールなんて、アマチュアで、別に何も懸かっていないんですよ。何も懸かっていないのに、そこでしのぎを削っちゃうのはおかしい。

嘘ついて吹くな でかい音を出せ!

伊東　みんなといるのが楽しいのかな。音楽はそのための道具だっていう人もいるよね。ところでさ、吹奏楽やってると、T-スクェアって知らないやつが多い。ていうか、オリジナルを知らない。『宝島』とか結構演奏してるんだけど、吹奏楽のための曲だと思ってる。
平野　確かにね。
伊東　おれたちはどこにいるの？って。いないんだ。結構寂しいの（笑）。
平野　まぁ、あれですよ。殿堂入りしちゃったと。国民的音楽になってしまったんですね（笑）。
伊東　もう一人歩きしちゃって。
平野　冷たいものですね。一人歩きを始めたら、本人は要らないと（笑）。おれだ、おれだって言えば。もっと声を高らかにして。
伊東　だから、一所懸命言っているの。最近吹奏楽と仕事をすることが多いんで（笑）。もうひとつ言ってるのは、自分が好きな音を出せってこと。まだアマチュアなんだから、そろえるなんて無理、あんたたちまだそろえるレベルにないだろうって。それよりももっとでかい音を出せ、嘘ついて吹くなって。とにかく好きにさ、先生もやらせればいいんだよ、バーッて。でかい音出せ、合わせるとか考えるな、そうすれば、自然に結果として合ってくるからって。音楽って不思議なところがあるじゃない。嫌な音は絶対に逃げるでしょ。先生も、生徒たちのことを信じて、みんなに好きに吹かせたほうがよほど生き生きとしたもので、最終的にサウンドしてくると思う。
平野　そうですよ。それ信じたほうがいいですね。
伊東　何位までに入らなきゃいけないとかさ、最低でもここまでいかなきゃいけないって思うから、変にまとめ上げるわけ。そんなところに音楽はないよ。音楽っていうのはもっと有機体で、やっぱりプラスアルファがあって、それが無限大に広がる瞬間があるわけ。生きながらにしてそれを体験できるっていうのが、音楽の素晴らしいところだからね。アメリカのジャズメンだってそうだよ。誰かがポロンって始めて、ひとり加わりふたり加わり、だんだん一緒になっていって、名演を残すわけじゃない。
平野　ほんとそうですよね。
伊東　だから、そこはやっぱり基本に置いて、音楽と向かい合ったほうがいいよね、教える側も子どもたちも。楽器吹きたいから入っているわけだからさ、楽器の楽しみをまず教えないとさ。
平野　そのとおりです。

連鎖を止めない自分を 支えてくれる楽器がセルマー

伊東　ところで、楽器の話もするかなと思って、このケースをあえて持ってきたんだけどさ。このピンクがいいでしょ（笑）。
平野　なかなか（笑）。
平野　楽器のほうは？（笑）
伊東　どんどん良くなってきたね。今、楽器吹いてて、めっちゃくちゃ楽しいもん。
平野　それは何よりです。
伊東　今までできなかったことがさ、バシバシできるから。いろいろ苦労はしたけどね。その代わり、デビュー当時からの十数年間かけて完成した自分の歌い節っていうのは、もうできないね。
平野　すごいですね。自分が今まで培ったものを犠牲にしてでも、また新しいステップに進めるのは。
伊東　そうだね。すれすれだよな。やっぱり一番大切なのは、ビジョンというか、遠くを見つめる力があって、そこに身体が向かっていっているってことかな。おれの場合、そんな根性はない、なんちゃって人生だから、強力なブラックホールみたいなものを見つけると、おおおおおって吸い込まれるわけ。そうするとさ、生き残らなきゃいけないから、そのためにいろいろなことを学んで、それが自分になっていくっていう感じかな。
平野　そのブラックホールというのは、興味っていうことですか。
伊東　そう。それが連続していって、結果として形になる。そのときには作品にできなくても、その次のもの、その次のものって常にその連鎖を止めないこと。で、その連続の中で、こういう仕事がある、ああいう仕事があるって、意識を持つことが大切。そうすると、そのときのステージに対しての気構えが全然変わるし、もっと自分がでっかくいれるんだよ。それを支えているのが、この楽器。平野にとって、セルマーの魅力って何？
平野　セルマーの魅力ですか？　っていうか、セルマーの魅力なんてあえてここで言わなくても、さんざん語られているからいいんじゃないかという気もするんですが（笑）。
伊東　おれもさ、魅力って特に考えたことないから、先手必勝で平野に振ったんだ（笑）。
平野　ずるいな（笑）。でも、僕個人としては、まだ試されていないんじゃないかと思われる可能性。たとえば発表されたばかりの頃入手したこのシリーズⅢも、6年目か7年目の頃に

Masataka

もう駄目だと思ったんですよ。大体ラッカーってそのぐらいで寿命がきちゃうんです、鳴りが悪くなっちゃって。しょぼしょぼになっちゃって、変えなきゃ変えなきゃって思いながら1年使っちゃったわけですよ。そうしたら、だんだんちょっと違うツボがあるっていう感じになって、もう13年。

伊東　何か見つかったんだ。

平野　そう。ちょっと待て、こういう可能性がまだあったんだって。未知数な部分があるというか。だからといって古い楽器を使ったほうがいいと言っているわけじゃないんですが。

伊東　でもⅢだからな。

平野　そう。ジャズの人は古い楽器をよく好んで使うじゃないですか。

伊東　ああ、多いね。

平野　だからこの楽器も、古くなったときにどんなになるのかなっていうのを見てやろうと思っていて。身をもって試さないといけないから十何年掛かるわけで、それが問題なんです（笑）。だから、みんなやらない。でも、そういうことをやってみたくなる未知数な楽器であるところがいいかな。

伊東　なるほどね。確かに、セルマーってそういうところがあるよね。面白いんだよ。

平野　そうそう。

楽器と人が接したとき すごくでかいものが生まれる

伊東　楽器がいろんなことを教えてくれるしね。

平野　うまいこと言いますね。

伊東　音程も良くて収まりもいいのにそれ以上の可能性が見えない楽器というのもあるよね。セルマーって、ちょっとどこか暴れる感じがあったりするんだけど、そこに何かこう、セルマーの楽器のマジックがあるじゃない。そのおかげで、楽器が持っている何かをうまく表現に変えていける、で、その何かっていうのが、思った以上の広がりとか大きさを持ったりするよね。

平野　多分セルマーを吹いている人間はおおかたみんなそうかなって思うんですけど、セルマーの音ってどう？って言われてもわからない。

伊東　そうだよね。比較していないし。

平野　自分がいつも吹いている音だから、セルマーの音とは思っていなくて、多分自分の音だと思ってる。で、確かに、そういう個性を邪魔しない楽器だなとは思うんです。でも多分、セルマー以外を毎日吹いている人からすると、あ、セルマーの音だなって共通に見える音色があるんだと思うんです。こっちがしっかりお世話になっているくせに、メーカーの癖とか個性を忘れてしまえるぐらいの上質さがある。

伊東　楽器ってさ、人間と接することで、何かものすごいでかいものが生まれるんだよ。やっぱり表現はでかければでかいほどいいよね。存在もでかければでかいほどいい。体がでかい小さいじゃなくてさ、あり方の密度とかすごさは、強ければ強いほどいいし、大きければ大きいほどいい。どこまででかくなれるかってところが、楽器の一番大切なポイントのような気がするね。

平野　なるほどね。

伊東　そういうことが125年もの間続いてるんだよな、セルマーは。自分が聴いて育った音が欲しくて、その時代の楽器を手にしたら、あのときの音がするとかさ。あこがれてた平野さんになれるとか、そういうことってあると思わない？　やっぱりそういうふうになっていく楽器ってさ、素晴らしいよね。使い捨ての道具ではないっていうところがさ。

平野　今ふと思ったんだけど、そっちのフュージョン系と違って、クラシックって新しいほうに傾いているじゃないですか。

伊東　そうだね。僕もニューヨークで見つけたオールドは素晴らしかったんだ。それが吹きたいっていうやつがいて、だったらもうって譲ってあげたんだけど。本当にいい音がしてたんだ。もうね、どれだけ吹いたかわからない。でも、ふと気付いたのは、その楽器の音なんだよ。自分がアルバムで聴いていたあの人の音、あの時代のにおいがするんだよ。で、それが今度は邪魔をし始めたわけ。自分がもっとこういきたいと思ったときに、どうしてもその音からの延長線で作らないといけないとしたら、これは面倒臭いなって思い始めたわけよ。

平野　なるほどね。

伊東　そうすると、自分がそういう音楽を吹かされている自分でしかなくなって、自分がこう吹いているんだという自分の主張みたいなものが全部マスキングされちゃうわけだよ。

平野　音楽の先生がドって言うみたいな。

伊東　そうそう。

平野　おれのドはおれのドだって言いたい（笑）。

伊東　それに、今この時代に出てきたもののほうが、スペックも絶対に良くなっているわけだし。作っている人たちは必ず、もっといいものを作ろうと思って作っているんだから。特にセルマーの楽器は、その作り手の思いみたいなものがものすごく強くアピールしてくるんだよね。

あ、これだ！の1枚が 入っているのがバンドーレン

平野　リードはバンドーレン？

伊東　もちろん。

平野　これ、バンドーレンなんだけど。

伊東　真っ黒じゃん。

平野　それ割ったら、伊東さんといえども許しませんよ。

伊東　おれにはわからないね、これは。この人の人生はわからない（笑）。

平野　わからないでしょ。だってこれ、箱出たのは5年前か6年前ですから。

伊東　それ、ずっととってあるの？

平野　本番しか使わないですけどね。

伊東　延べ時間としてはどのぐらい吹いたの？

平野　50時間はいっていると思いますよ。だって1個の本番丸々吹いて2時間は吹くわけでしょ。

伊東　しまっておこうよ。怖いよ、それ。確かにずっと使っているとなじみは良くなってくるから、いいリードにあたったときはなるべく長く使いたいけど。ここまで何年もずっと使ってっていうのはわかんないな（笑）。

平野　まぁ、僕のリードは置いておいて

プロフィール

伊東たけし／いとうたけし

1954年3月15日生まれ。福岡県出身。
大学在学中よりソロ・サックス・プレイヤーとして活動する傍ら、学生ビッグバンドに加入し、コンサート・マスターを務める。数々のコンテストに参加し、多くの賞を獲得。
1977年にTHE SQUARE（現T-SQUARE）に加入、1978年にプロデビューを飾る。以来、バンドのフロントマンとして活躍。
1984年には「サントリーホワイト」のCMにスクェアの曲が起用され、伊東本人もヴィジュアル・キャラクターとしてCM出演。バンドの人気を決定的なものにする。
スタイリッシュな一面は数々のファッション誌でも取り上げられる。プライベートでもスポーツを楽しみ、テニス、スキーはプロ級の腕前。オールシーズン・アウトドア派ミュージシャンである。
ソロ・プレイヤーとしても国内外のアーティストと交流を深め、伊東特有の力強く透明感溢れるサックスの音色は、今や国際的なレベルで認められている。2007年12月にリリースしたソロ最新作「Mellow Madness」では自身の音楽的なルーツでもある“ソウル・ミュージック”への熱い想いを集約。スティービーワンダー、ライオネル リッチー、スタイリスティックスをはじめとするブラックミュージックを代表するアーティストの楽曲を中心にセレクトしたSmooth Jazzアル バムとなった。
2008年2月からは、マクドナルド プレミアムロースト コーヒーのキャラクターとしてもCM出演し、5月からのプレミアムロースト アイスコーヒー キャンペーンでは、引き続きCMにも出演すると共に、自ら作曲したT-SQUAREの新作アルバム「Wonderful Days」収録の『Islet Beauty』がタイアップ楽曲となる。

平野氏が手にしているリードは、なんと、箱から出してすでに5、6年だという。伊東氏も思わずおそるおそる……

（笑）、落ち着く結論は、あ、これだみたいな1枚が入っているのはバンドーレンだけだってことですね。

伊東　ああ（笑）。

平野　結局僕ら、使うのは1枚ですからね。10枚いっぺんに使わないですから。だから10枚全部が良かろうが良くなかろうが、あまり関係ない。本番で使わせていただける1枚さえ入っていればいい、その1枚が5年かかろうが（笑）。

伊東　今はV16が一番なじんでいるんだけど、バンドーレンって、他にも青箱（トラディショナル）とか赤ジャバ（JAVAファイルドレッドカット）とか、それぞれの個性が明快にある。その日のコンディションとか気分でいろいろ変えたりもしてるんだ。本番で使うのは九分九厘V16なんだけど。

平野　V16って、ジャズカットっていうことですね。

伊東　そう。赤ジャバなんて、もっとジャズだったりするんだけど、表現するものが違ってくるのね。同じジャズの中でもいろいろ時代的なスタイルがあって。で、今V16が現代的なの、僕の中では。デビッド・サンボーンもV16を使っているんじゃないかな。

平野　いいですね。ジャズはいろいろ種類があって。だって、クラシックなんてようやく2種類目。

伊東　このV.12？

平野　そう。

伊東　箱の色が綺麗でいいね。おれはね、V16のこれだけは変えてほしいっていうのが、このパッケージの色。V.12なんて、この箱に入っているだけで、何かしゃれた音が出そう。V16はさ、イギリス系でしょ。ランドローバーとか、ウィンブルドン系でさ。何か牧草が見えてくる感じがするじゃない、これ。

平野　しょうがないですよ。ヨーロッパだから。ニューヨークになじんでしまった人にはちょっとね（笑）。

伊東　素朴さがどうもね。嫌いな色じゃないんだけど、これは嫌だ（笑）。

平野　わがままはそのくらいで（笑）、伊東さん、新しいアルバムが出るんでしょう？

伊東　そう。まだタイトルも未定だけど、この最後のサクソフォン・フレンズが出る頃には決まってるんじゃないかな。スクエアのツアーも始まるんだ。平野は？

バンドーレン V16を愛用する伊東氏。「V.12 なら箱の色だけでしゃれた音が出そう（笑）」

Takeshi Ito × Masataka Hirano

平野　いや、特には。

伊東　2人子どもがいて、特にで済んじゃうという（笑）。

平野　しばらく子育てで。

伊東　かっこいい。おれもそういう人生にしたいな。

平野　でも本当に大変ですから（笑）。まぁ、最後に伊東さんと対談できてよかったです。

伊東　そう、最後なんだよね。他の雑誌じゃ、平野とおれの対談なんて考え付かないよ。やっぱり素敵な雑誌だったね。

平野　本当に、僕と伊東さんがここにいるのも、野中貿易の発展とともに。

伊東　突然どうしたの？　事業家みたいに（笑）。

平野　想像してみてくださいよ。僕らの今日までの人生の真ん中ぐらいで、仮にここがなくなっていたらね、今日という日はなかった。

伊東　そうね。今後も何かの形でいろいろな情報を提供してもらうといいね。今って、昔ならものすごく時間が掛かったものが、ものすごく早く持てるじゃない。その代わり、その分成長してもらわないと困るけどさ。

平野　これは新たな門出ということで。

伊東　また次に何か形が変わって出てくることを期待しています。

T-SQUARE　時間旅行 5·26リリース決定!

T-SQUARE通算36枚目のオリジナルアルバムの発売が決定。タイトルは『時間旅行』。自由気ままに旅を楽しむ、時間と空間を超越し、自由に行き来する『時間旅行』で、IMAGENATIONの旅を楽しんでください。

■VRCL10101　定価¥3,045
■全10曲収録
01. Fantastic Story　～時間旅行～
02. Morning Delight
03. A Little Way Off
04. Ocean Express
05. Behind Lavender
06. Cosmic Pancake
07. World Star
08. Wild River
09. AiAiSa
10. MJ

T-SQUARE Concert Tour "時間旅行"

7/31　名古屋・ダイアモンドホール
（グランドライン 052-935-7558）
8/6　大阪・なんばHatch
（キョードー大阪 06-7732-8888）
8/7　渋谷C.C.Lemonホール
（キョードー東京 03-3498-9999）

さまざまな出会いに支えられて演奏を続けています

作田聖美

若手プレイヤーとして注目を集めているひとりが、金沢と東京に拠点を置き活動している作田聖美さんだ。なんと、バレエのキャリアはサクソフォンより長いという。

「私自身の力ではなく、周りで支えてくださる方々のおかげでこうして演奏を続けられている」と謙虚に語る作田さん。プロになるという目標も、早くから定めていたわけではないと言う。

「大学を卒業しても進路を決めかねて迷っていた頃、母が偶然ルーマニア国際音楽コンクールを目にし、何かのきっかけになるかもよと勧められて挑戦してみることにしました。まだ歴史の浅いコンクールですが、管楽器部門第1位ならびに全6部門の最高位という栄誉のある賞を頂き、ルーマニアの首都ブカレストの宮殿にてコンサートをさせていただきました。この受賞をきっかけに、私の出身地に本拠をおくオーケストラ・アンサンブル金沢からコンチェルトの依頼を頂くこととなりました。その頃ようやく本格的にプロとしてやっていく思いが定まったのですから、きっかけとなったコンクールや背中を押してくれた母にはすごく感謝しています」

その後も金沢での活動は多く、昨年は毎月のように帰っていたという作田さん。オーケストラ・アンサンブル金沢の企画コンサートへの出演、ツアー、委嘱作品の世界初演……。**「地元の方がすごく応援してくださるんです」**と嬉しそうに笑う。

作田さんといえば、つい最近まで公開されていたWeb CMへの出演も話題となった。“FIAT（イタリアの自動車メーカー）”と“ユナイテッドアローズ”のコラボレーションによるショートフィルムで、サックス奏者の女性をいきいきと演じていたが、演奏のみならず演技も要求される役柄にとまどいはなかったのだろうか。

「実は5歳の頃からクラシックバレエをやっているのですが、バレエも演技力を求められるので、CM撮影では不思議と緊張はしませんでした。そのバレエは今でもずっと続けていて、実はサックスよりキャリアがあるんですよ（笑）」

バレエのキャリアは、作田さんにとって非常に大きなもののようだ。

「バレエは、幕から出る瞬間にスイッチが入って普段の私からステージ上の私に変わる。その役柄になりきるんです。それはサックスを演奏するうえでもまったく同じ。ステージの袖から一歩出た瞬間から演奏家としての私を演じる。そういう気持ちの切り替えはバレエで学んだことなのかもしれません。サックスは中学に入って始めたのですが、音大受験を意識し専門的なことを学ぶにつれ、思うような演奏ができずに行き詰まることがありました。そんなとき、バレエで身体を動かして発散することは、気持ちの切り替えに不可欠なライフワークとなっていました。ジョギングなどのスポーツだと苦痛なのですが、踊るのは全然苦にならない（笑）。バレエを続けていたおかげで、トウシューズを履いてサックスを吹くという大変貴重なお仕事をいただいたこともありますし、本当に私、運だけでここまできているのかも（笑）」

何事にも前向きな彼女を支えているのは、セルマーのシリーズⅢだ。

「これまで師事してきた先生方もセルマーを使用している方がほとんどでしたし、何よりも歴史、絶大な信頼のあるメーカーであることは昔から知っていました。高価ではありますが、受験を控えて両親におねだりして楽器を買ってもらったときは、応援してくれている気持ちに応え、少しでもいい音が出せるよう楽器の重みを感じながら一所懸命練習していました。ちょうどⅢが出たばかりの頃で、最初は持つのも緊張したのを覚えています（笑）」

大学時代をずっとともに過ごしてきた楽器だが、一昨年ランクアップした。

「初めて楽器を吹いたとき、独特の艶っぽさや、セルマーにしか出せない美しい音色は瞬時に感じとることができました。プレイヤーの個性がすごく活きる楽器だと思います。卒業後オーケストラからソリストとして依頼をいただくようになってから、もう少しパワーが必要と感じて金メッキのものに変えましたが、これもとても吹きやすいです！」

【プロフィール】
作田聖美／さくたきよみ

石川県出身。3歳よりピアノ、5歳よりクラシックバレエ、12歳よりサクソフォンを始める。
2003年石川県立金沢辰巳ヶ丘高校芸術コース音楽専攻卒業。
2007年東京藝術大学音楽学部器楽科サクソフォン専攻卒業。
これまでにサクソフォンを筒井裕朗、宗貞啓二、冨岡和男、平野公崇、須川展也の各氏に師事。室内楽を中村均一、冨岡和男、須川展也の各氏に師事。現在ソリスト、室内楽を中心に国内主要オーケストラに客演奏者として幅広く活動中。
http://ameblo.jp/kiyomisaxdiary/

注目の若手プレイヤー②

ギタリストの父には「甘いもんじゃない」と反対されました

小山弦太郎

弦太郎といういかにも音楽家にふさわしい名前の小山さん。ノナカ サクソフォン コンクール・クラシック部門で4位に入賞したことでもフレンズ読者にはおなじみだろう。彼にその名を与えたギタリストの父の死が、彼を大人にしてくれたという。

「最初サックスの道に進みたいと言ったら、父は大反対。そんな甘いもんじゃない、保証もないし、絶対ダメだって。でも、いざ音大に入ったらコンサートには必ず来てひと言ふた言何か言っていく。結局どう思ってたんでしょうね。今でも謎なんです、やってほしかったのか、やめてほしかったのか」

「弦太郎」という素敵な名前を付けたギタリストの父が亡くなったのは、分野は違えど同じ音楽という道を選んだ息子が2度目のリサイタルを開く数ヵ月前のことだった。

「あの日から大人になった気がします。すべてがいきなりチェンジしたというか。それまでは東京で、フリー奏者として数少ない仕事を行っていたのが、たくさん演奏の機会を頂くようになった。ちょうど地元の小諸でも母校から講師のお話を頂きました。父が亡くなって家族が寂しくなっていたところだから、仕事で必ず帰らなければいけないという状況はとても良かった。家族にとっても、僕にとっても」

当時始めた“先生”という仕事は今も続け、4年目に入った。

「最初は、先生としての顔とプレイヤーとしての顔を使い分けようと思って頑張っていたのですが、やめました（笑）。先生はこうじゃなきゃいけないっていう自分の像があるにはあるんですけど、それをやるとすごく疲れる。生徒の見本になるような先生にならなきゃってやっていると、なぜか全然方向が変わってきちゃうし（笑）。だから、自分がやりたいことを一生懸命やっていよう、で、その姿を生徒に見てもらえばいいんじゃないかと思っています」

そして、プレイヤーとしての小山さんが今力を入れているのはQuatuor BやQUINTET・CIRCでのアンサンブル活動。

「楽器を始めた頃からの夢だったんです。アンサンブルってメンバー集めが大変で、続けていくのもかなり難しい。いろいろな人とやったりしていたのですが、2007年に結成したQuatuor Bでようやく念願がかなった」

いろいろな夢を叶えていく小山さんの楽器はセルマー。

「高校2年生のとき、武藤賢一郎先生に師事することが決まり、武藤先生が選んでくださったのがセルマーのシリーズⅡのラッカー仕上げでした。楽器のブランドも知らない田舎の高校生だったのですが、届いたときは、わぁー、かっこいい！って（笑）。今は僕の教え子たちはほとんどみんなセルマーを吹いているんです。音の鳴り方が抜群に良い。

昔初めて吹いたときも、明るい音がパーンと出て、知識なんて何にもないけど、楽器が鳴るっていう感覚はすごくあった。その後プレート仕上げを経て、今はシリーズⅢのゴールドプレート仕上げを吹いていますが、最初の衝撃的な好印象はずっと変わりません」

マウスピースはバンドーレンのA28。リードもバンドーレンのトラディッショナルの3とV12の2-1/2を併用している。

「吹いたときに頭の中のイメージと一致するのが、僕の場合はA28。色彩感が出しやすいんです。リードはバンドーレンが一番。断言できます。艶がある。音がいいんですよ。良い振動をしてくれるので、とてもいい響きがしますね」

ところで、今年6月、小山さんは3度目のリサイタルを行う。今回は「ストーリー」というタイトルを冠した。

「演奏者が“音”を使ってお客さんに本を読んであげるようなイメージ。すごく難しい現代曲であっても、ストーリー性を持って聴いてもらうことによって聴き方が変わってくるんじゃないか、そう思って企画しました。僕にとってはチャレンジの部分があるんですが……」

そのチャレンジのひとつがフェルドハウスの『ガーデン・オブ・ラブ（ソプラノ・サクソフォーンとサウンドトラックのための）』。CDとともに演奏する難曲だ。そして、核は、小山さん自身が友人である若手作曲家の高橋宏樹さんに作曲を委嘱した作品。

「タイトルのストーリーにあわせて、僕のストーリーを書いて！と。曲名は彼が付けてくれたのですが“ガーネットゼロ”。ガーネットは僕の誕生石で、父が亡くなったのが僕の誕生日でしたので、ゼロ、起源に戻るという……。父の死を今後も背負って生きていく、勇気をもらえるような曲を書いてもらいました。でね、実はこの曲名にはからくりがあるんです。それはコンサートでのお楽しみです。」

小山さんの今後に、そしてまずは6月のリサイタルに大いに期待しよう。

【プロフィール】

小山弦太郎／こやまげんたろう

1980年生まれ。長野県小諸市出身。16歳よりサクソフォンを始め、国際的サクソフォニスト武藤賢一郎氏に師事する。桐朋学園大学音楽学部演奏学科を経て、昭和音楽大学大学院音楽研究科修士課程修了。
現在は日本各地においてソロ、室内楽の他、シエナ・ウインドオーケストラや東京交響楽団など、国内主要オーケストラの客演で参加するなど演奏活動を行っている。Quatuor B、QUINTET・CIRC、音魂座メンバー。長野県小諸高等学校音楽科非常勤講師。
http://gentaro-saxophone.cocolog-nifty.com/

＊小山さんのリサイタルの詳細につきましてはP.13インフォメーションをご覧下さい。

新・メカニック講座
最終回

総集編〈後編〉
楽器にとって「未病」とは?

未だ病気に至らない…ものの、そのまま放置しておくといずれ 重篤な病に陥る可能性がある…そんな状態を「未病」といいます。「養生訓」で有名な江戸時代の医師、貝原益軒を真似て、 楽器の「養生訓」を、前号に引き続き展開してみましょう。

メンテナンスグッズの正しい使い方を心得るべし

現代ではさまざまなメンテナンスグッズが登場しています。内部の水分をとるためのスワブは基本的なアイテムですが、例えばその「進化形」のように思われているものに、細長い円錐状をした、モップのような器具が市販されています。これが、誤解された使い方をされる好例?なのです。その細長いモップのような形状は、ちょうど主管の円錐カーブにぴったりフィットするように見えるものですから、楽器の内部に差し込んでケースにしまう方が多いようです。ところが、これこそ最悪のことなのです。

もちろんその高い吸水性は、演奏後の管体にたまる水分を吸い取るためには非常に有効なのですが、水分をたっぷり含んだそれをそのまま楽器の中に差し込んだままにしておく、ということは、せっかく吸い取った水分をまるごと保存してしまう…つまり、適度に乾燥させておきたいのに、逆に「保湿」してしまうことになるのです。正しい使い方は、内部の水分を吸い取ったあとは楽器から取り出し、別に保管しておくことです。楽器の中でなくとも、吸い取った水分が蒸発できないような密閉された空間にしまっておくこともおすすめできません。理由は…わかりますよね?

その他に、キーオイルも安易に手を出すと事故のもとになるアイテムです。欧米のアーティストはキーの操作音をさほど気にしないのですが、日本人の感覚ではやはり気になるもの。録音でも、キーの操作音は興をそぐ…と、指摘する音楽評論家もいます。そんな「雑音」(逆に、それがダイナミックだと感じる向きには「雑音」とは感じられないはずですが) を防ぐためにキーオイルをひんぱんに差してしまう、そんなことはありませんか? 実は、キーオイルというのは金管楽器のヴァルヴオイルとはちがって、ごく微量を適切な箇所に差すだけで効果がある、というものなのです。多量に差したために、本来はオイルが付着してはならないパッド表面にまでオイルがたれてしまったり、あるいはホコリと「合体」して、おそるべき「謎の物体」と化してなめらかな回転を邪魔したりすることにもなりかねません。修理の際には、筆でやさしく、かつ繊細に、筆などで細部のホコリを注意深く除去していくのですが、余分な油分があると、せっかく除去したはずのホコリがそこに付着してしまうのです。前回触れたコルクグリスもそうですが、繊細な木管楽器(そう、サックスは金属で出来ていますが、れっきとした木管楽器の仲間なのです) のメンテナンスのためには「余分な油分は大敵」と覚えておくべきです。

保管と運搬の問題

もっとも深刻な問題は、音楽家につきものの「旅」(ミュージシャン用語では「ビータ」などと言ったりもするようです)。海外を含む遠方への演奏旅行の際には、飛行機を利用せざるを得ません。最近改訂された飛行機の持ち込み荷物規定の「改悪」(ほとんどの楽器ケースは機内持ち込みが「不可」となってしまうのですから!) は、ひんぱんに旅をする音楽家にとっては「死活問題」にもなりかねないことなのですが、その問題はここで議論しても始まりません。やむを得ず持ち込み料を支払うか、壊れるのを覚悟で荷物室にあずけるか…後者を選ぶ方はほとんどいないとは思います。「国内」といえども飛行機を使用するのが「常識」であるアメリカでも、この問題は最大の難関のようです。残念ながら現在の状況では、どのようなケースでも「完璧」に運搬時の「災害」(ほぼ人災…というか、ぽんぽん荷物を投げ込む運搬業者の姿を見るにつけ、輸送事故に関しては人災どころではなく「犯罪」といってもいいくらいの憤りを感じます) を防ぐことはできません。「未病」が顕在化するきっかけになるのも運搬時に手荒い扱いをされた、という場合が多いようです。

この問題に関しては、安易な答えは禁物です。どんなに完璧なケースでも、あらゆる事故から楽器を守りきることはできない、と考えておくことのほうが、音楽家にとっての常識」だと思っていたほうがいい。

セルマーのロゴの入ったケースは「貴重品だから、放り投げたりしちゃいけないんだ!」と、空港の業者が考えてくれる時代が来るといいのですが…。

最後に、長い間ご愛読ありがとうございました。今までの連載内容を会員の皆様方のサクソフォンライフに活かして頂けましたら幸いです。

楽器の機内持ち込みについて

ANA (全日空)

- 3 辺の合計が 115cm (小型機は 100cm) 以内の楽器類は、機内にお持ち込みいただけますが、座席上の収納棚に収納をお願いいたします。
- 3 辺の合計が 115cm (小型機は 100cm) を超える場合は、特別旅客料金 (AB) をお支払いいただき座席を購入するか、手荷物カウンターにて受託手荷物としてお預けください。

JAL (日本航空)

- 楽器ケースの 3 辺の合計が 115cm (小型機は 100cm) 以内の場合 →
  機内にお持ち込みいただけます (無料)。座席上の収納棚に収納をお願いいたします。
- 楽器ケースの 3 辺の合計が 115cm (小型機は 100cm) を超える場合 →
  ①お預けのご希望のお客さま:手荷物カウンターにて受託手荷物としてお預けください。楽器によっては専用ケース・コンテナをご用意しております。
  ②機内へのお持ち込みをご希望のお客さま:特別旅客料金 (AB) をお支払いいただき座席を購入ください。貸し出し用ケースもご用意しております。

詳細につきましては各社公式ホームページをご参照下さい。

大石将紀
これから留学を考えている人へ

最終回 語学について

留学についてのこの連載も第5回目、最終回となりました。今回は留学成功の重要な鍵となる「語学」についてです。

言葉が違う外国へ留学するのだから、語学の準備が音楽の勉強と同じくらい重要だということは、普通なら渡仏をする前から想像すると思います。留学前から心配しいている人もいることでしょう。

しかし、僕の場合は少し違いました。フランスに行ってからどうにかなると楽観していたので、日本での準備を全くして行かなかったのです。もちろんどうにかなるはずがありません。「一番の目的はサクソフォンのレッスンだから、言葉がわからなくてもきっとなんとかなるさ」という思い込みが大きな間違いだということは、パリ音楽院に入学して第一回目のドゥラングル氏とのミーティングで思い知らされました。その後の留学生活一年目はフランス語が全く分からなかったために大きく遅れをとったことは言うまでもありません。

サクソフォンや音楽の勉強の本質はなんとなく肌で感じることができますが、先生やクラスメイトと過ごす実際の学生生活はやはりそれだけではついて行けないのです。パリ音楽院ではサクソフォンのレッスンの他に毎週3時間フランス人と机を並べて過ごさなければならない楽曲分析の必修授業があり、そこでは2年間冷や汗の連続でした。

また留学3年目から始めた即興演奏科の授業。フランス語もある程度分かるようになったはずなのに、先生の言っている言葉が全然分からずどうしたものかと思っていたら、なんと先生が即興のテーマに使っている言葉は、数学の学術誌から拾ってきた専門用語だったのです。それを知った時にはまだまだ先は長い‥と気が遠くなるような思いでした。

もちろん中には語学の才能があって、すぐにマスターしてその後はフランス人並みに話したり理解したり出来る人もいますが、皆がみんなそういう才能があるとは思えませんし、少なくとも僕は残念ながらそういった才能はなく「もっと話せるように、分かるようになりたい！」という願望は留学生活を終えるまで常にありました。

僕の苦労話はこのへんにしておいて、皆さんにお勧めすることはひとつ。言うまでもないかもしれませんが「語学の勉強は留学を決めたらすぐに始めて、できるだけたくさん勉強するに越したことはない」これに尽きます。時間の制約のある留学生活ですから、言葉の問題でなかなか本質的な勉強にたどり着けないのは本当にもったいないことです。

「語学の勉強は現地で24時間使い続けないとなかなか上達しないし」と思っているあなた。もちろん実際にそうですが、日本で基本的な文法、単語を教科書通り頭に入れて留学をすると、現地で実際に使い始めた時の上達のスピードが違います。逆に留学をする前から日本で語学の勉強を始めている人で「たくさん勉強しているのに全然話せないし、理解ができない」と焦っているあなた、焦る必用はありません。頭の中に語学の知識があればあるだけ、後で実際に現地で使ってみた時に「ああ、そう言うことだったのか」と実用的な場面と結びついていくはずです。焦らずに勉強を続けてください。

現地に行った後も音楽の勉強と平行して出来るだけ語学学校に行って勉強を続けることをお勧めします。しかし留学後に一番大切なこと、それは「現地では現地の人とコミュニケーションする機会を出来るだけ持つ」。最近は世界各国に日本人留学生がいて、日本人コミュニケーションもたくさんあります。それらを否定はしませんし、僕は留学中にパリの日本人コミュニティーにいろいろと助けてもらい感謝をしています。ただずっとそこに身を置かずに、現地の人達の中にも飛び込んで行く事が言葉のみならず、音楽や文化や人生そのものの勉強になるということは、僕が留学を通じて強く学んだことのひとつです。ただこれも無理をしすぎて「パリ症候群」にならないように、気をつけてください。

こうして得た語学の能力や文化的な知識も、音楽の勉強と同じくらい大きな財産です。皆さんの留学生活の充実を心からお祈りしています。

使える! フランス語音楽単語帳

マウスピース	Bec
開き	Ouverture
狭い／広い	Fermé / Ouvert
リード	Anche
硬い／薄い	Forte / Faible
新しい／古い	Neuve / Vieille
リードの厚さ	Force d'anche
リガチャー	Ligature
ストラップ	Cordon
チューナー	Accordeur
メトロノーム	Métronome
譜面台	Pupitre
ネック	Bocal
キー	Clef (Clé)
オクターブキー	Clef d'octave
サイドキー	Clef de côté
ベル	Pavillon
タンポ	Tampon
発音	Émission
アタック	Attaque
タンギング	Détaché
ダブルタンギング	Double detaché
ロングトーン	Son filé
音階	Gamme
長音階	Gamme majeure
短音階	Gamme mineure
半音階	Gamme chromatique
インターバル	Intervalle
アルペジオ	Arpège
フラジオ	Suraigu
フラッター	Flatterzunge
四半音	Quarts de tons
重音	Sons multiple
スラップ	Slap
ビズビリャンド	Bisbigliando
循環呼吸	Respiration circulaire
強弱	Nuance
強く	Fort / Forte
弱く	Moins fort / Faible
速度	Tempo / Vitesse
速く	Vite / Rapide
遅く	Lent
中庸に	Modéré
速さ	Vitesse / Rapidité
長さ	Longueur / Durée
長く	Long (Longue)
短く	Court(Courte) / Sec(Sèche)
時間	Temps
速い／速すぎる	Tôt / Trop tôt
遅い／遅すぎる	Tard / Trop tard
音程	Intonation
高い／高すぎる	Haut(e) / Trop haut(e)
低い／低すぎる	Bas (se) Trop Bas (se)
ちょうど	Juste
正確さ	Justesse
音	Son
音高	Hauteur du son
高音	Son aigu
中音	Son médium
低音	Son grave
息	Souffle
息の圧力	Pression d'air
空気	Air
舌	Langue
口	Bouche
唇	Lèvre
歯	Dent
喉	Gorge
曲	Morceau / Pièce
作品	Oeuvre
自由曲	Pièce libre
課題曲	Morceau imposé
選択曲	Pièce au choix
現代曲	Musique contemporaine
即興曲	Musique improvisée
作曲／作曲家	Composition/Compositeur
編曲／編曲家	Arrangement/Arrangeur
楽譜	Partition

※ 冠詞は辞書等で調べてください。

大石先生のレッスンを受けたい方へ

- 対象はアマチュア、音大受験生、音大生、音大を卒業された方まで
- 年齢は問いません
- 先生はフランスにてサクソフォン教育学を修得され、指導経験は豊富です。
- 場所は基本的に先生のご自宅ですが、ご相談ください。
- レッスン料等、下記までお問合せ下さい。

info@m-oishi.com

大石将紀（おおいしまさのり） 2001年東京藝術大学大学院修士課程修了後、同年9月に渡仏しパリ国立高等音楽院に入学。サクソフォン科、室内楽科、即興演奏科を全て最優秀の成績で卒業後、さらに同音楽院第3課程室内楽科に進み2007年に修了。2002年から2004年まで文化庁派遣芸術家海外研修員。2008年3月に日本に帰国し、東京オペラシティ財団主催の「B→C 100」に出演。現在東邦音楽大学、大学院非常勤講師。 www.m-oishi.com

カ・カ・ワ・リ講座！

最終回♪

楽器を持ったその瞬間から『ご自由』にどうぞ！

文：NAOH

あなたにカカワリ、
あなたがカワル。
あなたがカワレバ、
サックスがワカル。
カカワリ講座、
いざ発進！

“もらうパワーと あげるパワー”

今日で最後のこのコーナー。毎回読んでくれてた人、ありがとう。今日だけ読んでくれた人、はじめまして（笑）！ さて、これを書いている頃はちょうどオリンピック真っただ中。みなさんはオリンピックみましたか？ 私、彼らにいっぱいパワーをもらいましたよ!! 今回は最後ということで、ちょっと、私が常々思っていることを綴りますね。

人は「パワー」を求め続ける生き物…

世界には“パワースポット”と言われる場所が数多くある。パワーストーンもまた然り。なにかこう自分に力を与えてくれる場所や物。神聖な気持ちになる場所というのか、私が思うに、自身に素直になれる場所、または、ふと立ち返る事をおしえてくれる場所っていうのかな〜…人って、何かを求め続ける生き物なのかな。パワーをもらいながら前に進もうとする生き物なのかな〜…って思うね。

昔のことだけど、子どもの頃から石にとても心惹かれていたのを覚えている。心惹かれる石をコレクションして、それを瓶につめて、毎日それを出しては並べて、並べては光にかざして石の美しさをみて、また瓶にそっとしまう。特別好きだったのが、お母さんからもらった石の入った小瓶。どこかへ出かける時はポケットにしのばせて（笑）。

大人になってからは、石のかたまりに興味がいったのかな、地層がとても好きになりそこにロマンを感じてたり（ちょっと変!?笑）。石って、いますぐ、たった今、ただそこにあったんじゃないんですよね。どこから来てどこへ行くのか、って思うとワクワクするんです。自分も石ころみたいにあちこち行ってみたい、できたらその石ころにくっついて旅したいって思ってました。

話は少しそれたけど、おなじくしてパワーストーンがむこうから私に近づいてきたこともあった。その石はインカローズ（ロードクロサイト）。石の意味は『バラ色の人生』を象徴するとともに『ソウルメイト』を引き寄せる力をもつといわれるもの。

石そのものが、人を引き寄せるパワーあるんですって。不思議ですよね。引き寄せられる石が何かっていうのは、人それぞれなんだって。でもやっぱり、人からもらうパワーはいちばん即効性があるような気もする（笑）自分に伝わるパワー！

NAOHさんがNew Orleansで購入したインカローズ。正式名は『ロードクロサイト』だが、別名『インカローズ』のほうがポピュラーで親しまれている。語源は『バラ色の石』。かつてインカ帝国が栄えたというアンデス山脈から産出されていることから「インカローズ」、別名「ロジンカ」とも呼ばれるこの石は、情熱の赤い花のような色彩と『薔薇色の人生』を象徴する石として非常に高い人気を誇っている。NAOHさんにぴったりの石だ

しかしわたし個人としては、どうやら周りにパワーを振りまいてる方が多いようで、とてもとても疲れきってしまった時期もあったんですね。ステージに立つことさえ、辛く思えたこともあったりして…。パワーを振り絞っていくばかりではなく、どこでパワーを補充すればいいかがわからなくなってしまったんですね。すっかり心のバランスを崩したことがあって。

「パワー」は天下の回りモノ？

“精神力が強くて強くて!!”って人なんていないと思う。絶対どこかでパワーの源を吸収してるはず！ もがいて、あがいて、苦しんで、何かを掴むまで何回も立ち上がって、はじめて感じる感動と達成感がそこにあるんだと思う。その経過を楽しむために、いま悩んだりしながら生きてるんだとも思うし。

パワーもらってる人は、もらってる一方じゃダメなんだよ、いつか恩返ししなきゃ（笑）。パワー振りまいてる人は、振りまく一方じゃ壊れてしまうよ、うまく自分を癒してあげて。

それでもスゴイパワーをばんばん振りまいてる神様みたいな人はいるけどね（笑）…なぁんてことを書いていたら、インカローズを久しぶりに装ってみたくなりました。

今日は石を身につけて出かけることにします♪

では、みなさん、パワーみなぎる潤った人生を!!!

またどこかでお会いしましょう！

bye × 2

プロフィール：大阪出身。3歳からピアノを始め、16歳でSAXに転向。土岐英史氏に師事。NYやMemphis、NewOrleansへ単身渡米、繰り返し武者修行に出た。帰国後、自己のソロ活動に加え、コブクロ、オーティス・クレイ（vo)ジャパンツアー、JB来日記念イベント、三宅伸治BANDや、米軍基地内でもライブステージをする（国内基地ツアー予定）。自己バンド「NAOH@FUNK FLOOR」東京、名古屋、大阪、京都、広島6月上旬ツアー予定。●InterFM-MegNet4局ー「DHC SOUND COSME」オープニングテーマ"PRECIOUS"●TVドラマ「Deep Love（原作Yoshi）」挿入曲"The Real World"、"Small Love"●パナソニックオキシライド乾電池 広告キャラクター●スバル・インプレッサ ウェブムービーCM出演。提供楽曲"Sasaison"●CSスカイパーフェクTV「ミュージック・エア」《青山陽一の音楽生活研究所ーTOKYO GUITAR SHOW》番組司会。●SAX & Brass magazine（リットー・ミュージック）コラム"サックス侍NAOHが行く"連載中。

【CONCERT】

田村真寛 サクソフォーン・リサイタル 2nd

「情熱が紡ぎだす、新たなレジェンド。」と銘打たれた田村真寛氏の2ndリサイタルが行われます。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、バッハ、メンデルスゾーン……田村氏のサクソフォーンが描き出す典雅なる世界に、乞うご期待！　共演は野田清隆氏（ピアノ）と遠藤真理さん（チェロ）。

■日時　4月18日（日）14:00開演
■会場　東京・飯田橋　トッパンホール
■料金　一般¥4,500（前売¥4,000）／学生¥2,500（前売¥2,000）
■内容　W.A.モーツァルト／「フィガロの結婚」より序曲、F.シューベルト／アルペジョーネ・ソナタ イ短調 D.821、F.メンデルスゾーン／ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調op.49、他
■問い合わせ　オフィスPAT　080-1284-7567／トッパンホールチケットセンター　☎03-5840-2222

Series FOCUS vol.1 Paul HINDEMITH

若手アーティストの意欲があふれるSeries FOCUS。第1回目はヒンデミットがフォーカスされます。出演は、サクソフォーン冨岡祐子さん（写真）と東涼太氏、ピアノ羽石道代さん、ヴィオラ長岡聡季氏という、まさに時代を担うプレイヤーたち。ヒンデミットの新たな魅力が発見できるかも……。

■日時　4月21日（水）18:30開演
■会場　東京・代々木上原　けやきホール
■料金　一般¥3,000／学生¥2,500
■内容　P.ヒンデミット／アルトサクソフォーンのためのソナタ、二本のアルトサクソフォーンのためのコンチェルトシュトゥック、オーボエのためのソナタ、組曲1922年（ピアノ・ソロ）、ピアノ、ヴィオラとテナーサクソフォーンのための三重奏曲Op.47
■問い合わせ　東京文化会館チケットサービス☎03-5685-0650　http://www.t-bunka.jp/／セルマー・ジャパン ☎03-5458-1521／foyer.musique@gmai.com

Figur Saxophone Quartet 渋谷&浜松

ドイツ語で音型という意味の「フィグール」をその名に持つFigur Saxophone Quartet。メンバーは野原孝（Soprano）、藤田鎮大（Alto）、小松崎美沙（Tenor）、黒田裕希（Baritone）の4名です。

「音型＝響き」は管楽器を演奏するうえで最も重要な要素であり、旋律的、リズム的、ときには和声的に表現される、音楽の基本。今回のコンサートで4人からどんな「音型」が届くか、乞うご期待！

【渋谷】
■日時　5月9日（日）14：00開演
■会場　アクタス・ノナカ アンナホール（東京・渋谷）
■料金　¥2,000（全席自由）
■問い合わせ　アクタス セルマー・ジャパン　☎03-5458-1521／Figur Saxophone Quartet　090-4741-0755　figur@hotmail.co.jp　http://figur.seesaa.net/

【浜松】
■日時　6月13日（日）14：00開演
■会場　ヤマハミュージック東海浜松店　かじまちヤマハホール
■料金　¥2,000（全席自由）
■問い合わせ　ヤマハミュージック東海浜松店　☎053-454-4111／Figur Saxophone Quartet　090-4741-0755　figur@hotmail.co.jp　http://figur.seesaa.net/

2本のサクソフォーンとピアノのトリオコンサート vol.3

塩安真衣子（サクソフォーン・写真左）、平賀美樹（サクソフォーン・写真右）、羽石道代（ピアノ）の3人によるトリオコンサートも、迎えて今回が3回目。今回も、そのアンサンブルの妙に聞きほれてください。

■日時　5月15日（土）14:00開演
■会場　東京・台東区生涯学習センター（ミレニアムホール）

■料金　一般¥3,000／学生（大学生以下）¥2,500
■内容　J.HALVORSEN／SARABANDE CON VARIAZIONI、A.BERNAUD／2本のサクソフォーンの為のソナタ、他
■問い合わせ　平賀　2saxophone.piano@gmail.com

所克頼 サクソフォーン・リサイタル

所克頼氏は岐阜県出身。2004年に名古屋芸術大学器楽科弦管打コース卒業。その後渡米し、インディアナ大学音楽学部パフォーマーディプロマ修了。現在、名古屋芸術大学大学院音楽研究科2年在学中ながら、という若さあふれる気鋭のプレイヤー。ピアノに松永祐未子さんを迎え、リサイタルを行います。優美なサウンドと多彩なプログラムをお楽しみに！

■日時　5月20日（木）19:00開演
■会場　名古屋・電気文化会館　ザ・コンサートホール
■料金　一般¥3,000（前売¥2,500）／学生¥2,500（前売¥2,000）
■内容　イェネー・タカーチュ／2つの幻想曲、ヨハン・セバスチャン・バッハ／シャコンヌ、フランソワ・ボルヌ／カルメンの主題による華麗な幻想曲、吉松隆／ファジイバード・ソナタ、セザール・フランク／ソナタ
■問い合わせ　k-tokoro@hotmail.co.jp/

長澤範和 サクソフォーン・リサイタル

長澤範和氏は2006年に昭和音楽大学研究生を修了したばかりの新進気鋭のサクソフォン・プレイヤー。ソロ、室内楽をはじめ、東京室内歌劇場、東京フィルハーモニー等オーケストラのエキストラ出演、吹奏楽指導など多彩に活躍中です。今回、東京・渋谷で「長澤範和　サクソフォーン・リサイタル